

巻頭言

ラトヴィア通い ―その今昔

筆者が研究対象とする、ヨーロッパの北東部、バルト海に面した国ラトヴィアを初めて訪れたのは、1988年夏のことである。以来、1991年を除き、毎年訪れている。当時ソ連邦の構成共和国であったラトヴィアは、まだ社会主義共和国であり、簡単に訪れることのできる国ではなかった。日本国内にいてもラトヴィア研究の進展は見込めず、かといってラトヴィアに直接研究に行くこともできず、それならば西ドイツにある専門の研究所で関連史料に触れようと一念発起、ドイツ政府国費留学生としてマールブルク大学に留学中のことだった。このマールブルク留学中に、ラトヴィアへのチャーターフライトによるツアー企画に参加する機会を得たのである。これはまさかのような出来事だった。

1988年9月、私を除くツアー参加者の全員が、現地に繋がりをもつ人々であったことは、現地に到着してからわかった。ソ連邦の指導者に若いゴルバチョフが登場し、ラトヴィアでも民主化や自立を求める運動が水面下から時折見え隠れする時期となっていた。そのラトヴィアが、ソ連邦からの独立を「回復」したのが、まさに、訪問できなかった1991年であった。8月に經由地西ドイツに到着した矢先、ソ連邦でのクーデター発生のニュースをテレビで見た。その時、研究所の先生に入国できても出国できなくなる可能性があるラトヴィア行きは留まるようにと言われた。せっかくドイツまで飛んできたのにと、後ろ髪をひかれる思いで断念、ドイツでの調査研究に切り替えたのは、賢明であったかもしれない。運動して、ラトヴィアでも、不穏な動きがあったのである。ラトヴィア行きのフライトには、ラトヴィアからの乗務員だけが搭乗し帰国したと、ニュースが流れた。

クーデターは流産し、その混乱のなかで、ラトヴィアは、独立の「回復」を宣言、1991年9月には、ソ連邦からも独立を承認されるに至った。前年に資料のコピーを依頼し、モスクワの許可を得た後に送られてきたコピー料金送金のための指定銀行は、国家独立の混乱の中で消滅し、数千円の支払い先がなくなってしまったことは心苦しい。その後、しばらくの間、ラトヴィア通いは、トイレットペーパー等の生活用品をスーツケースに詰めての旅となった。転換期で興味深いことは、ソ連邦時代のラトヴィアで知り合った研究者の多くが研究テーマを変更し、大学から外務省に転職したことであった。この現象の要因としては、ソ連時代の彼らの研究は、学位論文は母語のラトヴィア語ではなく、ロシア語で書く必要があり、当然のことながらテーマや視点に限界があったこと、彼らの多くは外国語に堪能であったこと、さらに大学教員の待遇が低かったことなどが考えられる。

30年弱にわたるラトヴィア通いで、激動の時代からバブルによる建設ラッシュ、多数の銀行の設立、そして、金融危機による景気の低迷や銀行の破綻などの変化をつぶさに見ることができた。人々のタンス預金を引き出すために、10%以上の利率で人が列をなしたことなど、一時の夢で、たちまち、破綻するのは当たり前であった。ドルへの交換はより魅力的であったろう。定点観測からは人々の表情が変わっていくのも感じ取ることができた。大きく発展した首都リーガ、一方で、重要な足である路線バスで3~4時間で訪れることのできる地方都市はいまだソ連邦時代と変わらぬ雰囲気から脱していない。こうした大きな格差は、今も顕著だ。

現在、都市には大きなショッピングモールが乱立し、食品や生活用品、贅沢品にいたるまでモノが溢れている。観光スポットにもなっている大きな屋内市場は、人とモノで圧倒され、ベラルーシのスーパーまで進出している。10分も歩くと、世界のブランドショップも並んでいるが、場外市場には、ソ連時代と変わらぬミニ店舗も、衣類・雑貨をぶら下げ、経済生活の格差をみせている。初めて訪れた時、外国人専用ホテルでメニューはあったが食事は供給されず、人々と列に並んでピロギというパンを買った。大きさだけは巨大な公設市場には商品がほとんどなく、売り子のおしゃべりだけがこだましていた。外国人専用ショップでようやく飲料を調達した。これらはもはや笑い話のような思い出だが、その時代を知らない世代が、政治や経済を動かし始めている。ロシア語を拒否して、欧米の言語の習得に励んだ人々が、再び、ロシア語の重要性にも気づき始めている。隣国はロシアであり、国の人口の3割程度は、ロシア語を母語とする人々なのである。

2004年は、NATOとEUへの加盟でとりわけ注目された年であった。特に、EUへの加盟を前提とする国民投票には注目が集まった。加盟賛成キャンペーンには、大統領や首相のイベントへの参加、メディアでの強力なサポートキャンペーンが展開され、筆者はその盛り上がりには驚き、人々の涙には衝撃を受けた。2014年のウクライナ危機以後、ロシアによる領空侵犯が頻繁に繰り返され、バルト海ではロシア海軍の演習も頻繁となり、他方で、国内には、NATO軍の兵士が駐留するようになっている。そのプレゼンスは、国民にとって脅威ではなく、安全保障の象徴でもある。今後の展開を注視せざるを得ない。

筆者にとって嬉しいことは、国立図書館が2014年8月29日に一つの建物に統合されたことである。1919年の設立以来、市内に分散された図書館として機能していたのである。筆者が通う歴史文書館も、顔なじみになったライブラリアンの仕事も合理的になり、仕事帰りの人々も夜まで利用できている。今年もまた、史料と向き合う旅の時節が到来した。

(志摩 園子)